



Title	スポーツ文化批判を通じた近代解釈の再検討 : 終着点(telos)なき進化と闘技(agon)の昇華について
Author(s)	西山, 哲郎
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57712
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	にしやまてつお 西 山 哲 郎
博士の専攻分野の名称	博 士（人間科学）
学 位 記 番 号	第 2 3 4 2 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 10 月 26 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	スポーツ文化批判を通じた近代解釈の再検討 ー終着点(telos)なき進化と闘技(agon)の昇華についてー
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 川 端 亮 (副査) 教 授 友 枝 敏 雄 教 授 牟 田 和 恵

論 文 内 容 の 要 旨

本稿のテーマは、タイトルにある通り、近代化の産物であるスポーツ文化の批判を通じて、再帰的に近代理解の刷新を狙ったものである。

近代理解にはもちろん様々な解釈があるが、ここではそれを産業・自然科学的な「蓄積・漸進説」と芸術・人文科学的な「ラディカル革命説」に大別した。それぞれの説には、その主張を動機づける社会背景があって、接合は容易ではない。しかし、ますます混迷を深める現在においても、近代思想が依然として我々の生のベクトルを左右する力をもっている以上、近代解釈を（統合とまではいかなくても）ある程度整理して、将来の見通しが立つようにするのは時代の課題である。その手掛かりとして、上記二つの近代理解をつなぐ“ミッシングリング”となる可能性をもったスポーツ文化に注目した。

本論文では近代スポーツ文化を人類普遍の運動文化としてではなく、Norbert Elias が主張したように、近代資本主義の発達にともなう英米文化圏のグローバルな覇権の成立と不可分の文化運動として捉えている。これを踏まえて 1 章では、近代以前の遊びや軍事訓練などの運動実践が、競技団体の整備や勝敗機会公平性の保持や形式的ルールの普及といった近代装備を組み込むことで、はじめてスポーツとなったことを示した。同時に、井上俊の提案した「聖・俗・遊」のパースペクティブを援用し、スポーツが近代化の特徴である「脱埋め込み」を特に押し進めた実践として、社会・経済とのつながりを保ちながらも、世俗の利害から相対的に自立した地位を獲得したことを指摘した。これにより、既存の「仕事」対「遊び」、「聖」と「俗」というような二項対立的な議論では見逃されがちだった、スポーツ文化のダイナミズムが再発見されたが、この発見はそのまま近代解釈の読み替えにも援用されていく。

2 章では、日本における近代スポーツ文化の受容（それは近代受容の一環でもある）をある種の再創造として理解する。明治維新によって武士階級が崩壊した後、明治期の教育界の重鎮であった嘉納治五郎は、旧来の柔術をスポーツ競技化も視野に入れた「柔道」に読み替え近代的な再生を図った。彼は柔道を（幕藩体制の侍ならぬ）近代国家の公僕たる「国の侍（＝国土）」のアイデンティティを支える文化実践として再発明した。その普及の手段として開発された「段級制度」は、剣術や弓術といった武芸一般を近代化する際にも転用され、それらを現代に生き延びさせた。

この段級制度は、その文化普及装置としての有用性から単に武道に留まらず輸入スポーツであるスキーを含めた様々な文化実践に転用されていくことになる。段級制度は、特に第二次世界大戦後の発展によっ

て、上からの押しつけではないヘゲモニックな国民性の醸成に寄与するようになり、今も我々の生活に影響を与えている。

3 章では、スポーツとジェンダーの関係を通じて、近代化が「^{ディシプリ}規律的な身体」を生成してきたのかどうかを再検討した。確かに、産業資本のイデオロギーに近いスポーツ文化は、その中に機械論的な身体観を組み込み、男性中心主義的で「健常者」優先的な人間観とは切り離しがたい負の側面をもつ。しかし、スポーツ文化がもつ両義性は、それを取り囲む社会条件の変容を意図したルールの修正があれば、因習的な価値意識を転覆させる力もはらんでいる。この点において、スポーツ文化の身体観は、Michel Foucault が批判した抑圧的なそれに近い部分はあるものの、近代化を通して多元的な価値の創造につながる面もあるといえる。なお、この章では昨今のジェンダー理解の変容を紹介して、自然科学的な身体像と社会科学的なそれが交差を始めている現状も伝えている。

4 章では、全地球レベルの資本活動の循環が完成した今、マイノリティの文化がグローバル化の圧力によって力を失っていく状況を課題として、可能な対処法を模索してみた。それも保守勢力が主張するようなローカルな伝統の復権に頼るのではなく、未来志向の「共通文化」を創造する可能性を近代スポーツ文化から読み解いている。Immanuel Wallerstein が批判したように、“Global Culture”の可能性を模索することは逆にそれが世界システムの強化に荷担してしまう危険性をはらんでいる。それでもスポーツには、競技活動のなかで“emulation（匹敵戦略）”を利用することで、現実の敵対関係を演劇化し、昇華していく力もある。またそれは身体経験に変容をもたらすことで、他者の抑圧の基盤ともなる固定化されたアイデンティティの構築様式を組み替える可能性も秘めている。

5 章では、もっぱらスポーツ文化の現状に対する批判を提示した。「後期近代」とも呼ばれる現在、社会の様々なサブシステムは個々に孤立し、相互の有機的な連関は失われつつある。スポーツにおいても同様の事態が進行し、内的な合理性の追求が暴走し、以前の利点や倫理が失われつつある。そうした事態の処方箋として、ここで、4 章で提起した「ユニバーサル・スポーツ」の概念を再登場させ、スポーツがもつ遊戯的な社会性の提供する公共空間を活用し、個人のアトム化や生の断片化に抵抗するための手段を模索した。

最後に終章においては、これまでの議論すべてを総括する形で、スポーツ文化の分析から得た知見を、近代理解の再構築に役立てようとした。

ここでは Chantal Mouffe や William Connolly の議論を参照しながら、スポーツ文化のなかに闘技的民主主義を涵養する可能性を探った。本論文では、近代理解を刷新するための「たたき台」として Anthony Giddens の近代理解を利用しているが、スポーツ文化の批判を通して、それには関連する二つの問題があることが判明した。

ひとつ目の問題は進化の方向性についてである。従来の近代理解（それも特に産業・自然科学的なもの）に親和的な考え方として、我々が進むべき道筋を単線的にとらえる傾向があったが、現状を考えると、それは実態に沿わないだけでなく、我々の生に危険をもたらすようにさえなっている。二つ目の問題は対立関係の抑圧に関わる。進化の方向性を単線とみなす考えに触発されて、多くの近代思想家は文化の多様性を超えて単一の合意形成が可能であるにとらえてきた。しかしながら、冷戦終結以降の多元主義の時代において、「理想的発話状況」や「無知のベール」といった道具立てをもってしてもひとつの正解を合意することが困難となった。皮肉にも、合意形成のための努力が、むしろ対立を激化させる様相さえ呈している。

Mouffe や Connolly にいわせると、理想状況を想定する論理こそが他者を悪に仕立てる機構を提供してしまっている。価値の多元状況で生じる紛争に対処するには、一方を善とし他方を悪とする二項対立的な論理構造を絶対視せず、対立関係から生じる彼我のアイデンティティの仮構性を認知すると同時に、それでもなお対立が永続する可能性に備える必要がある。近代解釈の刷新には、こうした新しい論理の採用が必要だが、それにはスポーツ文化ですでに実践されている敵対関係の遊戯的かつ闘技的な昇華がヒントに

なるだろう。同じ指摘は最初にあげた二つの近代解釈の対立についてもいえることであり、それらについても（統合とまではいかなくても）^{アゴーン}闘技的な交流関係の模索が必要と思われる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、スポーツ・スポーツ文化の近代と通底する特徴を丁寧に描き、スポーツ文化の問題点とそれを乗り越える新しいスポーツの形態を提案することによって、近代社会の問題を考えるものである。スキー、サッカー、体操競技などのポピュラーなスポーツから、インタークロスやゲイ・ゲームズなどあまり知られていないスポーツまで幅広く題材に取り上げて、歴史社会学、ジェンダー論、グローバリゼーションの視点も取り入れて、最終的には近代を論じている。

第1章では、スポーツと遊びの違い、仕事の違いを明確にし、近代以前の遊びや軍事訓練が、公平性や普遍的なルールを持つことによって、19世紀以降、急速にスポーツとして成立したことを論じるとともに、「聖・俗・遊」の枠組みを再評価している。

第2章では、柔術から柔道への変化、スキーの日本への導入を近代文化の受容と見なし、段級制度の働きを論じ、第3章では、オリンピックのセックステストなどを取り上げて、スポーツに見られる男性中心主義的で健常者優先的な人間観をえがく。第4章では、スポーツの世界的普及に、スポーツが政治・文化・経済の摩擦を減じる可能性を認める一方で、欧米スタンダードの押しつけ、競争至上主義、商業主義の弊害を無視できないものとし、ユニバーサル・デザインの考え方を取り入れ、ハンディキャップ制度を採用した「ユニバーサル・スポーツ」を提案している。第5章では、スポーツにおいて「聖・俗・遊」のバランスが崩れると問題を引き起こすことを指摘し、聖が強すぎれば国家のイデオロギー装置になり、俗が強すぎると功利主義に飲み込まれ、紋切り型のジェンダー枠組みの再生産装置になる。遊びに特化してしまうと社会的な影響、効果を目指さず、競技そのものに自閉することを示す。そして、ユニバーサル・スポーツは、記録にこだわらないにもかかわらず、「遊」の側面を活用することでわくわくするスポーツとして成り立たせることができるとする。

そして、これらのスポーツ文化の分析から得られた知見を近代理解の再構築に貢献する議論に結びつけようとする。すなわち、ユニバーサル・スポーツという新しいスポーツ文化の考え方が、現在のモダニティの理解に新しい解釈をもたらす可能性を論じている。単線的な進化、対立の抑圧という近代社会の問題点を乗り越えるのに、スポーツ文化ですでに実践されている敵対関係の遊技的闘技的な昇華がヒントになるのではないかと結論づけている。

本論文は、様々なスポーツ競技を取り上げ、それらを細部まで描くことによって、現在までのスポーツ界の問題点を重厚に描き、また、スポーツと近代が互いに共生関係にあることを丁寧に描いている。そして、これらの緻密な記述を元に、スポーツ文化から近代とはなにかを考えようとしている点が、この論文の最も優れた点である。

以上の点で、本論文は博士（人間科学）の学位を授与するに十分に値するものと判定した。